

第22回日本けん玉協会杯 レポート

文:大川英一郎六段(静岡)

第22回日本けん玉協会杯争奪戦。よくJKA杯とかJKAカップなどと称されます。当日集まった中から予選を勝ち抜いた上位20名の選手が、10種目を各5回、合計50点満点の、あらかじめ決められた技を何点取れるか、という得点制の競技を行ないます。この大会は毎年5月に行なわれる「全日本けん玉道選手権」とならんでけん玉の世界の最高峰のひとつ。毎回誰もがパーフェクトな優勝を目指して挑んできたのに誰も成し遂げられなかった経緯があります。昨年、それまで小学生の世界でスーパースターだった中学1年の女の子が初めて歴史的な50点を取るまで、ずっとです。

今回から、新しい優勝賜杯が使われます。重さ25kg、高さ88cm(台座を含めると約1m)。まだ誰もこれを掲げてはいません。けん玉協会が発足してから30年、かつて現役だった名プレイヤーたちが後進を育ててきましたが、その後進(僕らの世代です)が育ててきた選手たちが、ここ数年、ものすごい勢いなんです。実際問題、若手の選手に社会人である我々が勝つのはとても困難なことになりました。2年前からはこのJKA杯に限り、小学生が参加可能になりました。冗談じゃありません(笑)。



さて、当日欠席2名により大会参加人数は61名。多いなあ。上手な人ばかり61人ですか。どうしよう。くじ引き、けん玉検査(公正に試合をすすめるため厳しい検査)を経て、予選が始まります。くじの番号1番から、だいたい5名くらいずつ、前に出ます。選手は、記録係を含めた総勢約10名の審判団にズラ〜と目の前に並ばれて、そこで試合をします。

予選は20点満点。各1回ずつ行ないます。

1.飛行機 2.ふりけん 3.世界一周 4.うぐいす 5.地球まわし
6.ヨーロッパ一周 7.灯台 8.はねけん 9.さか落とし 10.けん先すべり

11.宇宙一周 12.うらふりけん 13.けん先おもてうらすべり 14.つるし一回転灯台 15.一回転灯台〜さか落とし 16.一回転飛行機〜灯台 17.さか落とし〜はねけん 18.うぐいす〜けん 19.地球まわし〜うら地球まわし 20.灯台とんぼ返り
(11〜20番目の技は、そのまま決勝での10種目になります。)

まず高得点の上位15名はすんなり予選通過、そして残りの全選手が敗者復活戦で5つの席を争います。今回この人数なので、敗者復活戦にだけはどうしても回りたくないな、と思っていました。ワタシのくじは47番、予選第9組です。審判団に一礼、予選開始。コール係の「〇種目目、〇〇」につづき、主審の「はじめ！」の合図。各選手、慎重な手つきで始めます。プレッシャーのなか深呼吸する選手、静止しなければならぬ技で手が震える選手もいます。

2.ふりけん。回転が少ないものの、持ち前の前進を使った粘り腰で成功させます。とにかく普段どおりに、そうやすやすと体が動いてくれる状況ではありません。

4.うぐいす。はじめての静止技。体の動きも止めて3秒ガマンしなければなりません。無事に大皿のふちにのったものの、右手が0.1mmくらいの幅で小刻みに震えます。少しずつ右方向にずれる玉。震えながら修正する手。斜めになって静止したまま、成功。3秒が長い。

13.けん先おもてうらすべり。苦手な技。この技を成功させるポイントを中心に練習中に調整を重ねてきました。この技は、文句なしに成功。

14.つるし一回転灯台。空中でけん玉を手から放す技です。再び手でキャッチする瞬間、けんと玉が接触、空中で乱れがでるものの、良く見えています。しっかりキャッチ。良く見えているときはヒザも使えていて、滞空時間も長く、うまく技が決まります。

16.一回転飛行機〜灯台。スタート後、けんはきれいに飛んできたものの、失敗してしまいます。ずれにしてみれば、1〜2mmほどだと思います。

19.地球まわし〜うら地球まわし。これもまた苦手技。こちらは特に、個人的に長年試行錯誤を繰り返してきた技です。これもバッチリ

成功。

予選得点は19点。ミス1回です。もし決勝で他の選手と同点になった場合に、予選得点の高いほうが順位が上になるので、満点を狙っていたものの、8組目までの様子から、19点までは予選突破が確実そうだったので、ほっとしました。

結果、満点はわずか2名、19点が7名、ここまでが問題なく当確ラインでした。キビシイ！！18点の選手の一部は、決定戦の末に敗者復活戦に回されてしまいました。

自分は参加せずにすむことになった、敗者復活戦。残された46人が争う、たった5つの決勝行きチケット。

敗者復活戦は、決勝技の前半5種目(No11～15)を1回ずつ、計5点のうち何点取れるのか、というもの。決着がつかなければ、その選手たちは後半5種目をやり、それでも決着がつかなければまた前半、以下決着がつくまで前半と後半に繰り返すライしなければならぬのです。



ワタシも去年、別の大会で珍しく予選が奮わず、敗者復活戦に回りましたが、あんなやなものはありません。「1回でも落としたら即終了」という状況で戦うわけですから。これを見ながら他の選手と話していました。「とにかく5点を取り続けるしかないよね」。

やはり5人ずつ並んで、技をやります。予選得点の低かったほうから行なっていきましたが、なかにはこんなメンツが含まれる組も。こんなメンツが敗者復活戦に参加していること自体、この大会予選が厳しいものであることを物語っています。

川辺くん:全日本選手権2連覇 向來くん:全日本&JKAの2冠 有美ちゃん:前回のJKA覇者(史上初満点優勝者)

広木くん:クラス別選手権(Aクラス:五段以上)優勝者でもしかめを7時間続けたことがある選手

さてここは見なくちゃな～なんて思っていたら、なんか失敗してるんです！他の選手にしてみれば、彼らはまず落としてくれないだろうな、と考えているはず。実際彼らですら4点。おそらく1回でも落とせばアウトという恐怖心にも近い心理が、多かれ少なかれ働いたのでしょう。驚いたことに前半5種目をすべて決めた選手がゼロ。これはあまりにも意外でした。意外すぎました。4点を取った選手たちが決勝へからもコマを進めました。この場面に自分がいたら、きっと4点や、悪ければ3点を取っていたでしょう。

ようやく全ての予選競技が終了しました。かわいそうなのは審判団です。ご飯を食べる時間がないのです。参加者が多く予想外に時間がかかったので仕方ないといえば仕方ないのですが、それにしてもタイヘンだったと思います。



決勝は敗者復活組の5名からやります。予選得点の低い順に、最終組は19点の中から3名と予選満点の2人。ワタシは最後から2組目、19点と18点が混じた組です。50点満点の決勝戦で同点だった場合には予選得点が高い選手が上位になるため、予選が満点だった最終組の2選手はそれだけで有利なのです。ワタシが優勝したければ、この2選手とは同点ではいけないのです。

決勝戦は10種目を前半5種目と後半5種目に分け、まず1組目から最終組までが前半5種目×5回ずつ=25点分をやり、つまり途中経過が分かる仕組みになっているわけです。決勝進出者全員が前半を終えたら、同じ要領で後半5種目の25点分をやり、最終的に50点満点のうち、何点取れるかで順位を競います。

ワタシと同じ組には、第19回の同大会で優勝した重木(しげき)洋くんがいました。彼も予選19点、去年の中村有美ちゃんに続く50点を狙っています。ものすごく練習熱心で、練習ではいつも優勝ラインの点を取っている、そんな選手です。練習ルームと一緒に

調整していたら、他の組の経過を逐一知らせてくれました。ワタシはチキンなので、他の選手を自分からは一切見ないようにしていましたが、決勝1組目で広木さんと川辺くんが25点(つまり前半ノーミス)を出したとのこと。大きな先制パンチです。過去の大会でも、この先制パンチが効いて予選1組目から優勝者が出たことが何度もありました。彼ら2人に対しては、少なくとも同点である必要があります。

さて2組目終了。ちらっと得点掲示板を見ると、予選2組目の前半結果は24点が最高でした。油断なりません。そんなことより、だいたい自分がどれだけミスを抑えられるのか、それが心配でした。過去に決勝で何度も苦い経験をしているので、とにかく自分との戦いです。前半予選3組目、自分の出番です。左隣には小学6年生ながら予選18点を出した見城崇くん(静岡市)。同じ大川一門である飛鳥くんの愛弟子です。去年の文部科学大臣杯(小学生の日本選手権)の男子東海代表で、準優勝しています。

1.宇宙一周。糸が軽く引っかけりそうになりましたが、無事に決めました。

2.うらふりけん。けっこう凡ミスをしやすい技ですが、これは文句なく無難に成功。

3.けん先おもてうらすべり。前半のなかで最も苦手な技。とめけんのようにけん玉を持ち、玉がけんにささった状態から、玉を、手のひらを上にした状態でけん先の裏側に乗せる、そんな場面があります。そこが苦手なんです。前日の練習の時点で、その解決法は見えていたのですが、体が無意識に動いてくれる次元ではないので、正直言って5点を必ずとる自信はあまりありませんが、事前の調整で、そこを重点的に復習していました。

1回目、成功。よし。2回目、同じ要領で…。成功。もうドキドキです。とにかく前半はここが勝負なんだから！と言い聞かせ、攻めの姿勢を続けました。3回目、成功。深呼吸をひとつ。4回目、成功。5回目は、敢えて5回目とは思わずに。「5回目、はじめ！」と言われても、心の中では、1回目はやだから「2回目、はじめ」と言っていました。結果は、成功。体の余計な力をこの場面で全て抜いていられました。心の中で、「よし！」と言いました。

4.つるし一回転灯台。3種目めのおかげで、波に乗っていました。このあたりから、担当してくれる審判との間に、なんとなく信頼関係のようなものが強く生まれてきます。自分が審判をするときもそうですが、審判は、もちろん厳しく、公正にジャッジをしなからず、一生懸命な全ての選手に対して、分け隔てなく「がんばれ！」という思いを注いでくれます。決めるたびに自分自身にうなずいているのを見て、時々「がんばれビーム」が飛んでくるのです。結果、この種目も5点。

5.一回転灯台～さか落とし。これまた波に乗れました。慎重に、かつ大胆に。ヒザの動きも充分だし、けん玉の滞空時間も長く感じられます。よく見えていました。問題なく5点を取れた瞬間。担当審判の田窪さんがニコッ。25点です。

ほっと一息ついて、もう次の後半5種目のほうに頭は向いていました。同じ組の重木くんも25点。さすがです。前半を終えたところでみんなから「良かったね」「さすが」と言ってもらえましたが、「まだまだ」「うん、これからこれから」としか答えられませんでした。

すぐに練習室で、予選時のミス修正を確認。疲れすぎない程度に練習をしました。

練習といっても、後半5種目を1回ずつ練習して、全て1発で決められるか確認しただけ。

要はボンと「はい、じゃ今やって」と言われて、直前の感触もなく決められるかどうか。一度やればなんとなくできてしまうので。

さあ、ついに後半5種目。本番用のけん玉を手にして、一礼。1点ミスをして49点ですが、そんなことはもうどうでもいいことでした。「満点をとろう」という意識も、もちませんでした。目の前の技ひとつに集中し、成功させる。ただそれだけのこと。

6.一回転飛行機～灯立。予選で失敗した技。とにかくこの1回目だ、と自分に言い聞かせました。不安にはなりますが、ここでいつもの練習のテンションでいってはいけません。どの選手も、意外にそれができないものなのです。でも今回は違っていました。口には出さなかったものの、今年、つまりここで優勝すれば、自分のけん玉人生が大きく展開しはじめることが分かっていました。ややゆっくりした回転で飛ばしてきたけんは、しっかりと穴に収まってくれました。感覚をつかんだら、あとは慎重に集中して決めるのみ。細かい部分で体がしっかりと勝手に反応してくれているのも感じました。

7.さか落とし～はねけん。問題は、やはりはねけんでしょう。しかし今回はポロツと落とす気が全くしませんでした。それだけ確信をもって臨めました。おそらく傍から見ていると、回転がゆっくりすぎてかろうじて決めている、と見る方もいるでしょう。しかし良く見えているので全く問題ありませんでした。

8.うぐいす～けん。ここまでノームスで来ましたが、ここは不安でした。今回使った「夢元(むげん)」というけん玉は、玉の塗装が美しく、蛍光灯の光もよく反射してくれるのでその光が、個人的にけっこう苦手だったりするのです。その結果、穴の位置を誤認してしまうことが稀にあったので、要注意でした。幸い、今まで培った体の感覚がそれを補ってくれました。5年前に準優勝した時は、この技の1回目ではじめて失敗していますが、今回はまず成功。しかし、3回目を迎えたところで、アクシデントが！

ピキーン(!)。…右足の人差し指が。。。…つりました。……競技を中断させるわけにいかないと思い、黙って続行。ここは気合です、5点をとれました。

9.地球まわし～うら地球まわし。さあついにここまでノームスできました。最大の難関です。昔から、練習で満点をとろうとすると、決まってミスをするのがこの技でした。

ちなみに、まだ足の指はつったままです。その2回目でした。

ピキーン(!!)…こんどは右足の中指が。。。。。。…つりました、ハイ。う～ん、ここで落としてたまるかい。続行!! 実際あとからプレー中のVTRを見ても、それは全く分かりませんでした。とにかくけん玉が良く見えていたので、4回目まで無事成功させています。そして5回目、…成功。5点です。この瞬間、はじめて優勝が垣間見えました。

10.灯台とんぼ返り。5年前の準優勝時は、この技の5回目、つまり最後の最後で失敗してしまい、「日本一」の称号がするりと手のひらから逃げてしまったので、その反省を生かさなければなりません。

あとはこれを全て決めればいいんだな、そう思って落ち着いて取り掛かりました。

1回目、出だしはある意味イチバン緊張しますが、無事成功。

2回目、感覚をつかみ、成功。ちなみに足の指は治っていません。

3回目、このあたりで注入した「気」がぬけそうになりました。集中する瞬間に抜けてはまずいので、意識を再び元通りにもどし、成功。

4回目、あと2回。緊張するといけないので、心の中で「2回目、はじめ！」と言ってははじめました。バッチリです、成功。

5回目、運命の5回目。5年前は失敗した5回目。心の中では2回続けて「2回目、はじめ！」と言ってははじめましたが、灯台を乗せたところからは、もう自信がみなぎる、文句のつけようのないとんぼ返りする自信がついていました。優勝者にふさわしい心理です。しっかりヒザも曲げて、回転してきたけんを、やさしく受け止めます。

成功。さあ、審判が集計しています。あとは自分が知らず知らずに犯していたミスがないことを祈るだけ……。選手に合計得点が表示されます。

目の前の田窪審判員の手には「50」の文字。すぐと同じ組だった重木くんの得点表示を見ました。「47」。このあとの最終組には決勝前半戦が終了した時点でノームスがいません。

観客に得点が表示されます。「50」。史上2人目、満点です!! どもめく会場。しかしそれよりも、なんとと言っても、この達成感です。この感覚は、言葉では伝えきれない、映像でも伝えきれないものでした。



観客に向かって、そしてサポートしてくれたヨメさんに向かって、小さくガッツポーズ。審判の田窪さんにも笑顔がこぼれます。

一礼したあと、うれしい気持ちとホッとした気持ちが入り混じりながら、皆から握手してもらいました。ヨメさんとがっちり握手、やった〜と抱き合って喜びを分かち合いました。去年5月の全日本選手権でまさかの予選落ちを喫し、その悔し涙を横で見ていた彼女。気持ちはひとつだったと確信しています。最終組が始まるのを見届けて、次の瞬間にはもう報告の電話を両親にかけるため、走って廊下に出て行ってしまいました。



表彰式にて、かるくインタビューをしてくれる司会の山木さん。彼は何度も日本一になった伝説のチャンピオンですが、以前から「優勝のチャンスはそう滅多にめぐってくるものじゃない。そのときにものでできるかどうかが大事なんだ」と言葉をかけてもらっていたので、やはり「やっと実現できたか」という安堵がありました。実は足の指がつっていたんだと話したあとに、山木さんから、

「それでは大川選手にけん玉を掲げていただきたいと思います。」

「はい」。

巨大けん玉を抱えた、その1秒後。

ピッキ〜〜〜〜〜ン。。。。

両足の太ももが……………つりました。

ひざを軽くまげていないと即座に太ももがつってしまう状態になったので、微妙に直立出来ていないんです(笑)。その姿勢のまま25kgのけん玉を抱えてしばらく立っていました。ま、ウチのステージピアノよりは軽くてまだマシなんです(笑)。その日の夜は、周りの人たちに報告、そして打ち上げを祝勝会としてやってもらいました。みんなどうもありがとう。

今大会を振り返ってみると、勝因はやはり「攻めの姿勢を貫いた」ことにあるような気がしています。気持ちが守りに入ると慎重になりすぎてしまう、このことを本当に身をもって理解するのに、10年かかりましたが、今回新たにつかんだこの確信をいつまでも大事にしたいと思います。

けん玉界にとって今回の優勝で特に意味のあったことは、

- 1.中学生・高校生が頻繁に優勝をしていくなかで、練習に制限のある社会人が優勝できたこと。
- 2.去年に続く、満点での優勝が出たこと。
- 3.静岡県に、初めて日本一の栄冠がもたらされたこと。

個人的には、

- 1.ついに「心・技・体」が本当に一致したプレーをできたこと。
- 2.「プロけん玉講師」にふさわしい経歴が加わってくれたこと。
- 3.教え子たちに、「やればできる」と身をもって証明してみせられたこと。

といったところですが、これが今後の自分にとって、また静岡にとってどんな意味の通過点になるのか、それがこれから一生懸命にならなければならない点になってくることでしょう。

JKA 杯に参加して

文:見城崇 五段(静岡)

今回、初めて JKA 杯に参加しました。会場に着くと大人の人がたくさんいて、難しい技をたくさん決めていました。これは簡単じゃないと思いました。

自分の出番はまだかまだかと、なかなか落ち着けず、何度も何度も練習室に行きました。自分よりひとつ前の組のときになると、足などいろんなところが震えてきて、本当にできるのかと心配になりました。

予選では、本当に緊張して、決勝にいきたいと思いつつも体が動かず、簡単な技を失敗してしまいました。予選通過者発表の時、18 点でも通過できるのかがものすごく心配でしたが、失敗したのが前半の簡単な技で、後半は失敗がなかったという理由で 19 点の次に通過者として呼ばれました。おかげで少し緊張がほぐれました。

予選を通過することが目標だったので、決勝ではやるだけやろうと思いました。決勝はあまり緊張することなくできました。前半で 2 回失敗してしまったので、後半は 1 回 1 回を集中して、失敗ないように心がけました。でも、結局 2 回失敗してしまったので、46 点でした。

47 点の人が 4 人もいて、1 点の差は大きいと思いました。でも、8 位で入賞することができて良かったです。改めてレベルの高さを感じた 1 日でした。

